

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY

No.8 July 2016



イースター島 モアイ像

イースター島はチリ領の火山島。モアイ (Moai) 像は、島で産出される凝灰岩で造られている。

CONTENTS

◎ 特集：外国語学習の苦勞と醍醐味	
・人それぞれ折角始めた中国語学習を如何に楽しむかー苦勞 (?) と醍醐味ー	国際コミュニケーション学部 塩山 正純…………… 2～3
・語学のコツは大量のinputと大量のoutput	国際コミュニケーション学部 鎌倉 義士…………… 4～5
・昨日より、そして今日より多いトキメキと感動を	法学部 木村 義和…………… 6～7
・外国語学習の苦勞と醍醐味ー我が語学学習の遍歴ー	国際コミュニケーション学部 田本 健…………… 8～9
・私の英語学習苦勞話	文学部 永瀬美智子…………… 9～11
・M先生の宿題	法学部 北尾 泰幸…………… 12～13
・中国語学習1年目のみなさんへ	文学部 三野 豊浩…………… 14～15
・英語との格闘の日々、そして、醍醐味	経営学部 古川 千歳…………… 15～16
・私のフランス語学習体験談	地域政策学部 岩崎 正弥…………… 17～18
・ロンドンの生活	経済学部 竹内 晴夫…………… 19～20
・学ぶ楽しさの見つけ方	豊橋語学教育研究室事務局 加藤 雅子…………… 20～21
・語学学習の苦勞と醍醐味	名古屋語学教育研究室事務局 関 麻央里…………… 22
◎ 学生の外国語学習	…………… 22～27
国際コミュニケーション学部4年 伴野 花恋、短期大学部2年 野津 祥代、	
経済学部2年 安田 成慶、文学部4年 信田 佑哉、地域政策学部4年 張 添懿、	
経営学部4年 辻村 慎志、国際コミュニケーション学部4年 小島友里亜	
・Canada Adventures in February 2016	法学部 ジョン・ハミルトン …… 28～33
◎ eラーニング～今号のオススメコース～	…………… 34
◎ eラーニング～利用者の声と利用状況～	…………… 35
◎ Welcome to Language Center! (豊橋校舎ランゲージセンター紹介)	…………… 36～37
◎ 2015年度(第21回)外国語コンテスト結果報告	…………… 38～39
◎ 2016年度外国語検定試験奨励金のご案内	…………… 40
◎ 編集後記	…………… 40



外国語学習の苦労と醍醐味

人それぞれ折角はじめた中国語学習を如何に楽しむか —苦労(?)と醍醐味—

国際コミュニケーション学部 塩山 正純

なんでも自分が本当に好きでやっていると、傍目には苦労に見えても、本人にとっては別に何とも、ということが儘あります。この冊子を読んでいる時点でもう皆さんは十分外国語が好きはなはずで、「苦労」なんて自覚しているでしょうか。そんな皆さんは何のため、どんな動機で外国語を勉強してみようと思ったのでしょうか。即答できますか。

プロ語学教師の黒田龍之助は専門のロシア語はもとより世界の様々な言語を勉強していますが、ある本の中で「格好イイからやる、でいい。そのことばを話すひとたちのことが少しでも分かるのが楽しい」という意味のことを言っています。イケてると思ったらとりあえずやる。素敵ですね。また、ある中国語音韻学の先生（経営学部長の矢田先生の先輩）はFBでこんな発言をしていました。要約すると「しゃべれて適当にコミュニケーションをとれば良いというスタンスは、相手に相当違和感をあたえ、軽蔑される。そして最終的には語学力に比例しないダメージを受ける。だから、語学を学ぶなら、語学の勉強が遅れるとしても、その言語地域の文化や歴史等についても学ばないといけない。語学学校なら2年でやる語学を、大学では4年

かけてやる意味・意義を考えないといけない」ということ。実に示唆的な考えです。

愛大でも豊橋なら地域政策学部の荒川先生が中国語、日本語から英、独、仏語、韓国朝鮮語まで、名古屋なら国際コミュの鎌倉先生がさらにポルトガル語やスペイン語まで幅広く学んでいます。視野が広がるとメインの言語がさらにクリアに見えてくると言います。世界の言語文化に通じた先生方の授業を受けたり、実際に訪ねたりすれば、何かしら学びのヒントが得られると思います。きっと。ついでに紹介するのが国際コミュの岩田晋典先生。観光学の研究フィールドを東アジアに広げるなかで中国語の重要性を感じていましたが、一緒に現地調査した2月の台湾で私が中国語で現地の人々と話すのが羨ましくて、とうとう今春からピカピカの一年生に混じって中国語（彼は頑に「華語」と言う）の勉強を始めてしまいました。彼にとってはつまり自分の世界を広げるためのツールとしての「華語」なんですね。

さて、自分自身の中国語での苦労?となると、極めて楽天的に現在に至るが故にネタに事欠く状態ですが、それでも2つばかり紹介しておきましょう。1つ目は一目瞭然ならぬ一“耳”瞭

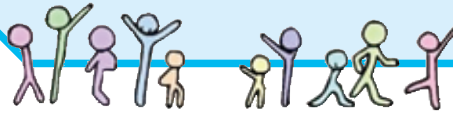
然、「発音が悪いと何を言ってるのか全然分からない」ということ。最初いい加減に過ぎてしまっただけでも後々の修正が極めて難しいのが発音です。幸運にも私は最初に発音指導のカリスマに教わって「発音」の怖さに気づけました。その指導のエッセンスが詰った参考書（日下恒夫著『アタマで知り、カラダで覚える中国語の発音』）は新品が残念ながら売り切れ。でも安心して下さい、いまはどのテキストも音声教材でネイティブの発音をなぞれます。それに愛大は中国人が極めて多く、その気になって探せば発音の先生はそこら中にいます。別にアナウンサーのような美しい発音で！という訳ではなく、最低限相手が判別できる音を口から出して、同時に相手の発音も聞きとって、会話を成り立たせようよ、ということです。私自身、こんな中年オヤジになってもまだまだ周りに助けられながら、発音チェックを怠らず、より良い工夫を模索しているのです。若い皆さんが今やなくて何時やるの、ということです。本当に。

もう一点、難儀なのは外国語学習には、どこからが「できる」なのか自覚できる線引きが無いと言うことです。だから往々にして自己評価と他人の評価が著しく乖離することがある。誰とは言えないが皆さんの周りにも心当たりがあるでしょう。一見べらべら話しているように見えるけれども、なんだかなあ・・・というのが。哀しいかな、「昨今流行りの」会話だけに頼ると、きちんと聞き・話すチカラが身につかないのです。遠回りに見えて実は大事なのが読解、速読、熟読。文字情報をきちんと読み取ることでコツコツ身に付けていくしかないのです。論理的な話の展開を理解する「苦勞」がないと、登山に例えるならば上に進めず三合目や五合目で無自覚に足踏みを続けているだけなのです。歌舞伎

の七代目尾上菊五郎があるインタビューで「満足したところで進歩は止まる。俺もまだまだ。もっと精進しねえといけねえな」というようなことを言っていました。そうなんです。苦勞・苦行に感じる必要はありませんが、もう一寸コッパをこうしたい、アレもコレも覚えよう、こんな工夫ができるかな等々、ちょっとしたことをコツコツ明るく楽しく続けたその先に、あれ！何か普通に読めてる、普通に会話できてる、ような自分に気づくことができるのではないでしょうか。いつか、たぶん。

私は学部生のときの中国留学中に「中国人は中国語で考える。日本人は日本語で考える。目の前に同じ一つの事象・現象があっても、発想が違えばアウトプットされる表現が随分と違う」という当たり前のことに気づきました。中国人の思考の土台である中国語を深く知りたいなあ、と思ったのがきっかけでこの世界に入り、現在に至っています。そして、数年前のある日のトイレ。スパッ、ドサッと出ずに鬱々としているうちにコレ中国語ならどう言うのだろう。気になって仕方がなくなってネイティブに聞いて廻りました。以来、これまでに得た中国語の回答の最大公約数は：“没拉痛快”（méi lā tòngkuai）。結果補語ですね。これを肯定にすると“拉痛快了”（lā tòngkuai le）、様態補語だと“拉得很痛快”（lā de hěn tòngkuai）。奥も深い、実は1年生で習う“吃好了”（chī hǎo le）や“没学好”（méi xué hǎo）“说得很流利”（shuō de hěn liú lì）に通じる文法の「王道」で表現できてしまうことを知ったときの嬉しさ。こんな調子で同じ一つの現象を日本語と中国語でどう捉えるのか、発想・表現の違いを知って、目からウロコの経験を重ねられる幸せ。私なりのささやかな醍醐味と言えるかも知れません。

語学のコツは大量の input と大量の output



国際コミュニケーション学部 鎌倉 義士

英語・スペイン語・ポルトガル語・フランス語・中国語・韓国語と日本語を合わせて、私は7ヶ国語が話せます。とはいうものの、そのレベルは異なり、英語とスペイン語なら仕事や雑談で問題なく使用できます。他にはフランス語と中国語の検定3級を取得しています。外国語学習の面白さは伝わることだと思います。勉強した外国語で意思疎通ができた瞬間は、いつでも嬉しいものです。ここでは外国語学習のコツと学習を楽しく行うヒントについて述べます。

大量のインプットと大量のアウトプットがコツであると表題に書きました。インプットとは言語学習で「聞く」と「読む」活動です。対して、アウトプットは「話す」と「書く」ことです。私は長年、外国語学習を続けてきて、単純にアウトプットとインプットを大量に繰り返すことが外国語をマスターするコツだと気づきました。聞いて読んだ表現を話したり書いたりする。それを大量に行うという単純極まりない方法です。但し、日本国内は外国語を大量に見聞きできる環境ではなく、話すことや書くことを試す機会が少ないことは事実です。では、その機会をどのように増やし外国語の能力を上げ、伝わる喜びを経験できるのか説明します。

インプットという言葉は応用言語学の一分野における第二言語習得理論の用語です。言語学者のクラッシュン (Krashen) は難しすぎるインプットは奨めず、現在の能力から少しだけ難

しい「 $i+1$ 」(i が学習者のレベル) のインプットを推奨しました。難しければ難しいほど外国語が上手になると思いますが、自分のレベルより少しだけ難しいインプットを選ぶようにしましょう。



NHK ラジオ英語講座 テキスト

英語を上達させたい学生へのお勧めはNHKラジオの「ラジオ英会話」です。私は英語学科の学生にも毎日聞くように勧めています。月曜日から金曜日15分の放送です。これを在学中続ければ、TOEICで満足のいく点数が取れることはもちろん、留学や海外での生活でも困ることはありません。私はイギリスで7年間留学する前から続け、帰国後から現在まで20年以上聞いています。毎日15分聞き、放送に合わせて英語を練習することで上達します。未修外国語として勉強した仏・独・露・中・韓国語などもNHKラジオで勉強してみましょう。英語以外の言語もラジオでの学習を続ければ、簡単な会

話で困らない実力を身に付けることができると私自身の経験で実感しています。

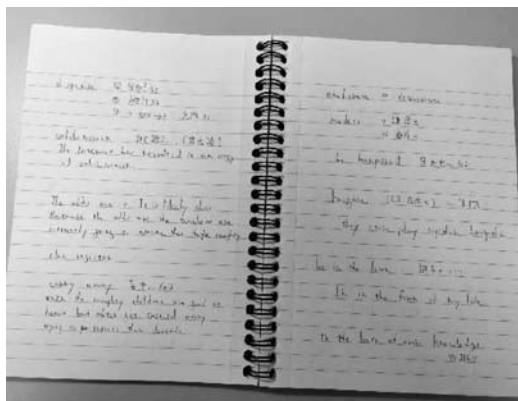
留学先でも大量のインプットは忘れずに。大量のインプットはコップに注がれた水がこぼれ出るかのようにアウトプットとなります。私のスペイン留学時は、日本語から翻訳されたマンガを購入し、その会話表現で勉強しました。子供向けのアニメはイギリスで朝早くから欠かさず見ました。子供用の本・アニメ・マンガは表現が短く単純で覚えやすく、実生活で体験しないことも作品では表現してくれます。そこで使えと思った表現はテレビの前に置いたメモ帳に書き取りました。新聞を読み、ニュースを見たときも使える表現はノートにメモしました。この表現を全て学んだわけではありませんが、表現を書き留めることで少しでも記憶に残り、実生活で使えるよう努力しました。

次はアウトプットについて述べます。アウトプットは機会を得ることが難しく、上達することが大変です。前述したNHKラジオ英会話でも会話の繰り返しやシャドーイングなどアウトプットの間はありますが、充分とは言えません。会話力を上げるには1対1での対話が力を伸ばす近道です。私は学生時代、大学に通う留学生を雇って英語で会話をしました。1対1での対話は授業と異なり、自分以外に答えてくれる人はいません。その緊張感が表現する力を伸ばすのに効果的です。現在ならネット上でスカイプを使用して行う英会話教室があります。私は最近このシステムでスペイン語を学びました。勉強したい時間に合わせて授業を選ぶことができ便利でした。ネット英会話ではフィリピン人講師が相手のものがあります。欧米英語圏の英語に慣れるだけでなく、アジア人が使う英語に慣

れておくことは国際的ビジネスを行う会社で働くときに必ず役立ちます。

学内のEnglish CaféやInternational Caféを利用してみましょう。2017年からはグローバルスクエア（仮）という外国語で会話をするサロンが大学内に開設される予定です。私もイギリスで経験したことですが、留学生は現地の友だちを作りたくてもなかなか機会がありません。大学内でも英語や外国語で話す友人を作る場があります。英語圏の留学生である必要はありません。英語を使っていろいろな国籍の人と話し、国際的な英語（World Englishes）に慣れ親しんでください。

私は外国語での会話の難しさをテニスや卓球などスポーツに例えます。外国語の授業は素振りの場です。試合といえる会話の場で、練習通りにボールを受けて返すことができるかが瞬間に行われる会話の難しさです。勉強したことが上手く表現でき、伝わる喜びを皆さんに体験して欲しいです。会話ができるようになったら、さらにより良く伝えるにはどうすべきかを考えるのが外国語学習の奥深さと楽しさです。



イギリス留学中の単語・表現ノート

昨日より、そして今日より多いトキメキと感動を



法学部 木村 義和

語学教育研究室からいただいたお題は、「外国語学習の苦勞と醍醐味」。しかし、私は苦勞話（というより苦勞そのもの）が大嫌いである。私の人生のモットーは「好きなことをして楽しむ。これが成功への近道」。というわけで、私の経験から得られた海外生活が楽しくなるまでの道のりを語ろう。

海外研修が認められて、42歳で初めての海外生活。いちおうの英語教育は受けてきた。しかし、おじさん世代は「読む」偏重の英語教育。「聞く」と「話す」は勉強したことが無いに等しい。それにもかかわらず、「何とかなるさ」という根拠の無い自信とともに、いざ海外（ハワイ）へ。海外生活をしてみると、「読む」は大丈夫。「書く」についても何とかなった。それなのに「聞く」と「話す」はさっぱり。英語で会話ができないのである。これでは楽しむどころか生活できない。そこで、楽しむために必要な「聞く」と「話す」能力を身につけようと考えた。

まずは、自己分析。私は、「読む」ばかりに英語能力が「ステ振り」されている。英語の文章を読むと、頭の中で日本語に変換され、日本語でモノを考える癖がついている。英語を聞いている時でも同じ調子だ。とても、英会話ができる状態ではない。ロースクールの授業は特にキツかった。レジュメやパワポの内容はすぐに理解できるのに、授業の議論のスピードについていけないのである。

そこで、色々な方法を試したが、40歳を超えたおじさんは頭が固い。何をやっても、ついつい日本語でモノを考えてしまう癖が抜けない。もう最後の手段だと思い、ハワイ大学やケンブリッジ大学でESL教諭の資格を取得した専門家の先生に個人レッスンをしてもらうことにし

た。これが、アタリだった。先生は、私が今まで学んだ英文法や構文の知識を、話すために必要な能力へと結びつけてくれた。「私の英語を映像で考えるようにしなさい。」という先生のアドバイスも効果的だった。私は「英語でモノを考える」コツが感覚として身に付いたのである。

コツが分かると、すべてが上手く絡み合ってきた。外国人と英語で会話したいと思うようになり、少しずつ英会話能力が向上して行った。会話ができれば、海外生活は楽しい！アメリカ人と交流ができるようになると、TVで見たような学生生活（客員研究員だったが）が始まり、映画のワンシーンのような「アメリカ！」って感じのホームパーティにお招きいただいたりした。ロースクールでも自分の専門なら何とかするという妙な自信が生まれ、ハワイ州弁護士会で報告したりして、法曹関係者とうまく少しずつ交流ができるようになった。こうなると、毎日がトキメキと感動の連続。ハワイの生活が楽しくてしょうがない。しかし、遅すぎた。スタートラインにたどり着いた時には帰国の時を迎えていたのである。「アレもしたいし、コレもしようかな」と考えることができるようになるまで時間がかかり過ぎていた。

さてさて、みなさん、私が経験から得たことを述べよう。英語を身に付けるには積極的に会話にのぞむ「度胸」や「チャレンジ精神」が必要であると良く言われる。これは正しい。しかし、私のような臆病者の「コミュ障」には、これはできなかった。「失敗をおそれるな」とか言われても「英語が出てこなかったらどうしよう」という不安な気持ちが私を臆病にさせた。では、どうしたら良いのか。「海外の生活に慣

れる」しかないのである。そうしたら何かのきっかけで「英会話のコツ」を掴むことができる。最初の「跳び箱」を飛べるようになったら、「跳び箱」は楽しい。あっという間に好きになって、楽しいことがたくさん待っている世界へ進むことができる。英語の勉強を100%の確率でトキメキと感動に変えられるのである。

というわけで、愛知大学の学生には、ぜひ学生時代に海外で学んでほしい。私はハワイで素晴らしいトキメキと感動を体験してきた。同じ体験を多くの学生にさせてあげたいという想いをこめてハワイ大学ロースクールスタディツアーを始めた。ここにはトキメキと感動がたくさん待っている。

ハワイ大学ロースクールスタディツアーについて宣伝しよう。スタディツアーは日本の大学生と大学院生向けにハワイ大学ロースクールが行っている短期海外学生派遣プログラムである。このプログラムの特徴的なところは、「もし私がアメリカのロースクールに留学したら、どんなに楽しい生活が待っているか」という「お試し」ができるという点である。アメリカのロースクールの授業を受けられて、ロースクール体験ができるだけではない。例えば、裁判所見学。これは単に施設見学には終わらない。実際の裁判を傍聴するし、裁判官と話をすることができる。しかも、最高裁判事などの大物とも話ができる。ハワイ州の上院や下院を見学した後は、州知事と話ができる。弁護士事務所を見学して、ハワイ州の弁護士会会長に会える。このようにスタディツアーはアメリカのロースクールにチャレンジすれば、その後、どんな可能性が広がっているのか実体験ができるのである。「人生はチャンスにあふれている」ことに気付けば、英語の勉強が大好きになってしまう。

臆病でも良い。度胸が無くても良い。楽しいことが好きであれば、誰でもトキメキと感動を得られる。外国語の学習はすべての努力が100%の確率でトキメキと感動に変わるのだから。法学部生は、ハワイ大学ロースクールスタ

ディツアーにぜひ参加してください。昨日とも今日とも違う未来の自分を見ることができますよ。Mahalo!



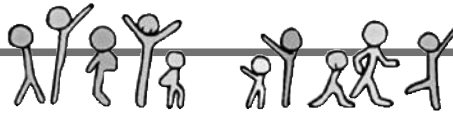
ハワイ州最高裁前（カメハメハ大王像前）



ハワイ州庁舎前



ロースクール中庭



外国語学習の苦勞と醍醐味—我が語学学習の遍歴—

国際コミュニケーション学部 田本 健一

1. 大学は英文科でしたが、英米文学にはあまり熱が入りませんでした。少林寺拳法の修業に明け暮れていたこともあったと思います。ただし、英文法や英語学にはかなり励んだような気がします。恩師の三上泰永先生の英文法には魅せられました。George O. Curme の *Syntax* (640 pages) という、今では古典的な英文法書を教科書に、かなりの長文を黒板いっぱい書いて、S, V, O, C, など伝統的学校文法でおなじみの略号を用いて解剖してくださったのが忘れられません。大学2年の時でした。一回の講義で15～20ページ進み、一年間で *Syntax* 一冊を仕上げるという具合でした。必修科目なのに、三分の二は落第。私はなんとか70点、Bで合格といった有様でした。にもかかわらず三上先生のゼミを希望しました。ゼミでは、原書を年間2冊読まされました。変形生成文法のものや、英語学に関するもの、特に4年次では、英語史の名著と言われている、Albert C. Baugh の *A History of the English Language* (447 pages) を最初から最後まで読みました。そして卒論は“*A Study of the Adverbials*”と題して英語で50ページほど書きました。第2外国語はフランス語でした。フランス語の先生の発音には魅せられました。読んだものとして今思い出されるのは、*La Beauté du Diable* かな。大学院の第2外国語はフランス語で受けようと思っていましたので、仏文法、仏文読解にはかなり力が入ったようでした。

2. 大学院では、Middle English (1100-1500)、とりわけ14世紀の詩人ジェフリー・チョーサーの英語を研究しました。入学後、真っ先に面喰ったことがありました。渡部昇一先生（指導教授）の演習は英語学についてドイツ語で書かれた本を読まなければいけないということでした。大学院に入ったその年の前半でラジオテキストに合わせてドイツ語の基礎を徹底的にやりました。後半はドイツ語の文法のおさらいと、独文読解をかなり本気でやったような気がします。指導教授の演習の単位を取るためでしたから。大学院2年目から指導教授の演習に出席し、辞書と文法書を頼りに、自分に割り当てられた分をなんとか訳すことができました。Karl Schneider の *Die germanischen Runennamen* はすごい本です。Wilhelm Lehnert Horn の *Laut und Leben: Englische Lautgeschichte der neueren Zeit (1400-1950)* は中英語末期から現代英語に至る英語の音韻史です。その発想と理論には圧倒されました。そして同時に、チョーサーの英語の関係詞構文に的を絞って修士論文を書いていたのですが、英語の読解力を強化することと、教養を広めるためだということで勧められたのが、*Great Books of the Western World* (54 Volumes) でした。これは全部現代英語で書かれていますので、ドイツ語や中期英語で苦しんだ後だけに、どんどん読み進められましたので、それは快感でした。とはいえ、54巻もある訳ですので、読了に何年かかかりました。

3. 次の転機は、大学院修士課程修了後5年位たった頃でした。ラテン語とギリシア語の独学が始まりました。文法の勉強は語尾変化を覚えることです。ギリシャ文字を読めるようになるまでまず一定の時間を要しました。うんざりするほど退屈な日々が流れていきました。覚えては忘れ、また覚えては忘れの繰り返しでした。もっと若いときに始めておけばよかったと思ってはため息でした。さらに追い打ちをかけるかのように、その頃から、古期英語（Old English：700~1100）の本格的な学習が始まりました。それはいつの間にか古英語期の語彙変遷研究へと進展しました。古期英語は今の英語とはまったく似つかないものです。もう一つの外国語と言えらると思います。古期英語の文法の学習は、ラテン語やギリシア語同様、語尾変化の暗記です。あれからもう30年位になります。この間、古期英語の語彙へのラテン語（あるいはギリシア語）の影響という角度から、古期英語の文献とラテン語（あるいはギリシア語）の文献を読みあさっては情報を収集し、分析、考究を重ねてきました。最近の一番の成果は、*The Macregol Gospels or The Rushworth Gospels*（Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company 2013; cxxxix+339）です。これは紀元後800年頃アイルランドのバー（Birr）という修道院で制作された極彩色写本（中身は四福音書）のラテン語と古期英語の行間注（イギリス中部で970年頃書き込まれた）を原写本（Bodleian, MS Auct. D.2.19）になるべく忠実に校訂したものです。読み荒らした分はこういうものを出版することによって罪滅ぼしをしたことになるのかもしれませんが。



人には得意、不得意があるものですが、英語の学習に関して私の不得意はリスニングでした。当時は一つの文が単語の集合体ではなく意味不明の音の連続にしか聞こえませんでした。ですから、大学4年生になる年に留学するためTOEFLを初めて受けたとき、リスニングのセクションが壊滅的であったことを覚えています。リスニングのセクションにはアメリカの大学の講義を模した部分があり、その講義を聞いた後に内容についての質問が続き、正しい答えを選ぶという形式でした。最初に例題の音声流れましたが、いつ例題が終わり問題の音声に切り替わったのかさえ分からなかったのですから、正解を選ぶはずがありません。とにかく気づいたときには問題文の半分近くが流れた後でした。

アメリカの入国審査もすんなりとはいきませんでした。飛行機を乗り継いだアンカレジで入国審査を受けたとき、荷物検査で何を聞かれているのか分からず、審査官が通訳者を呼んだのですが、さすがの私でも“*She can't understand English.*”という審査官のことばだけは分かりましたし、それが今でも耳の奥に残っています。振り返ってみると、あのリスニング力でよく一人でアメリカに行く気になったものだ和我ながら感心しますが、若さゆえの無謀さは不可能にする原動力にもなりえるのだと、年取った今しみじみ思います。

自分のリスニング力では大学の講義を聞き取ることができないことは分かっていたので、当時「最新の」カセットテープ・レコーダーを持参し、先生に使用許可を願い出て教室の最前列に陣取って、90分の授業を録音しました。大学の寮に戻ると、毎日テープを何度も聞き直しながらノート作りをしましたが、意味が分からず要約などできませんから、先生のことばを全て書くというディクテーションをしました。どうしても聞き取れないところは、ルームメイトに発音してもらい、時には書いてもらってから意味を辞書で調べました。当初は一回90分の講義のノート作りに5時間程かかりましたが、毎日続けるうちに少しずつ意味が分かる部分が出てきてその部分は要約することにしたので、ノート作りの時間は徐々に短くなっていきました。そんな作業を続けながら3か月経ったある日突然、講義を録音しなくても講義中に取りったノートで十分だと思える日がやってきたのです。英語の力の伸び方をグラフにすると、学習した時間と正比例する右肩上がりの斜線ではなく、階段を上がるような線になるのだと身をもって体験した瞬間でした。

リスニングの訓練はノート作りのディクテーションだけではありませんでした。私は寮生活を送るにあたり女子だけの階を希望したためレジデンス・ホールの最上階（12階）で、女子だけの和気あいあいとした雰囲気の中で毎日を過ごしました。同じ年頃の女の子たちの英語は年配の人の英語よりさらに速く、恐らく若者特有のことばも混じっていた為か、講義よりもさらに聞き取れませんでした。それでも、同じ階の女の子たちは日本人の留学生が珍しかったのか、英語が上手く話せないのを教えてあげよ

うという親切心からなのか、カフェテリアが閉まる週末の食事や、夜中に食べ物を持ち寄っておしゃべりする「パジャマ・パーティ」にしばしば誘ってくれました。私は皆のおしゃべりをもっぱら聞くだけでしたが、彼女たちの話を聞いているうちに、少しずつ内容が分かるようになっていきました。



Before（ルームメイトの Sheila と）

このリスニングの「訓練」には大きな落とし穴があったことに気づいたのは、日本を離れて半年が経過した頃でした。友人たちと撮った集合写真を送ったのですが、それを見た母からの手紙には、写真の中で私を見つけることができなかったという衝撃的な事実が綴られていました。つまり、自分では毎日の少しずつの変化に気づかないうちに、私は親が見分けれられないほど丸々と太ってしまっていたのです。夜中にお菓子を食べていれば当然の結果と言えるでしょ



After (6 カ月後)

うが、これがリスニング力アップの代償でした。

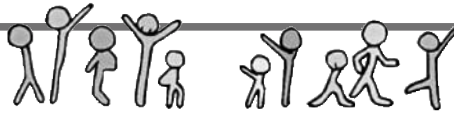
全く聞き取れなかった私でも 1 年間の留学を終えたとき、ある程度聞き取れるようになっていたことを踏まえると、リスニング力は音感の優劣に関わりなく慣れであることが分かります。ですからリスニングの訓練は今でも自分の趣味として続けています。

私は英語の海外ドラマや DVD を視聴するとき、字幕を参考にしながら台詞の英語表現に注意して、分からない単語やフレーズは発音を頼りに辞書で調べます。例えば、Fox のドラマ *NCIS* で時折アメリカの海兵隊員同士が互いの信頼を表現するときに言う “Semper Fi (Fidelis)” (常に忠実な) も辞書で調べたフレーズの一つで最近のお気に入りです。



大学のレジデンス・ホール 12 階の仲間たち

M 先生の宿題



法学部 北尾 泰幸

「今日の宿題は、文房具屋に行って、お店でいちばん分厚いノートを買ってこよう。来週、それを使ってやってもらう夏休みの宿題を発表するから。」アメリカ・カリフォルニア州出身のM先生は、前期もあと2週間を残すのみとなったスピーキングの授業で、このように話した。これは、私が外国語学部英米語学科の1年生だった時の話である。

「いったい何の宿題だ？ 日記でも書かせるのか？」そう思いながら、その日の大学からの帰り道、ターミナル駅の大きな文具店に行き、そこで売られていたいちばん分厚いコクヨの大学ノート「Campus Note」の80枚綴りを買って帰った（後で知ったのだが、コクヨのCampus Noteは100枚綴りがいちばん分厚いものだったそうだが、その文具店では売られていなかった）。

不本意入学した大学で毎日を無為に過ごしていた私は、「なぜこの大学に自分は来なければならないんだ」と口では言いながら、実はスピーキングの授業では挫折を味わい続けていた。なぜかクラス分け試験の結果、帰国子女が多いクラスに分けられてしまい、自分以外の受講生はペラペラ英語を話すのに、自分は全くと言っていいほど話せず、辛い思いをしていたのである…。そう、できると思っていた英語が「できない」のである。特にスピーキングの授業では苦戦していた。スピーキングの授業は、思いついていて自分を諫めてくれる授業であり、毎回の授業は自分の上向いた鼻がへし折られる辛い授業だったのである。そんなM先生の授業で出される宿題はどんなものかと、買った80枚綴りの大学ノートを机の上に置き、発表までの一週間を不安な気持ちで過ごしていた。

そして一週間後のスピーキングの授業。「買ってきたノートを机の上に出して。」M先生のことばとともに、みんなが一斉にノートを出す。

「いくらなんでも分厚すぎるんちゃう？」私がそう周りから突っ込まれたのも当然かもしれない…。80枚綴りのノートを持ってきたのは私だけだった。だいたい50枚か、多くても60枚のノートだった。M先生が、学生が持ってきたノートを見て回り、30枚綴りの学生に「買い直してきなさい」と言っている。私のノートをひょいと持ち上げ、パラパラ開いて、ニヤリ。“Good.”と言いながら教卓に戻るM先生を見ながら、「あの笑いは何だ… あー。もっと薄いものを買ってきたほうがよかったかなあ…。せやけど、いちばん分厚いやつって言ってたやないかー。みんなちゃんと探したんか？」と一人焦っている中、夏休みの宿題が発表された。

「えー、アカデミー賞を取った映画のビデオを10本借りてきなさい。映画を観て、知らない表現を全て抜き出し、英英辞典でその意味を調べて定義と例文を書き写すというのを夏休みの宿題にする。グッドラック。」えええ… ありえへん…。私を含め、みんなの顔が青ざめた。

だいたい、洋画をしっかりと観たことすらないのである。それを「英語を抜き出せって？」今だと、DVDで英語のキャプションを出すことなどお安い御用だろう。しかし当時はDVDなどなく、まだビデオテープの時代。インターネットも普及していない。ズルはできず、ひたすら音声で「聴く」しかなかった。

とりあえずレンタルビデオ屋にビデオを借りに行く。一気に2、3本借りようかとも思ったが、きっとそんな簡単にできないだろう… と思い、ひとまず1本のみ借りて帰ってくる。自分のお金を出して借りたビデオで、すぐに宿題をするのはもったいない。まずは宿題のことを忘れて、映画を鑑賞する。全て見終わって「ああ、いい映画だったなあ。」と思うのも束の間、ビデオを巻き戻して、ノートを広げ、宿題を始める。「あかん、全然わからへん。」言っている

ことばが分からない... それもそのはず、音が変わったり消えたりして、本来の音とは違うというえ、スラングも多く、これまでの勉強では聞いたこともない表現が次々と出てくる。テレビから出てくる音声を何気に聞くのでは埒が明かない。ヘッドホンをつけ、耳元で音を聴けるようにして、何度も何度もテープを巻き戻して、何とか音を拾う。拾った音を辞書で引いても載っていない...。どうやら、取った音は違っているようである。もう一度聴き、それらしい音の語を、スペリングを予測しながらいろいろ辞書で引く...。「あった、これや!」 やつとのことで調べた表現の定義と例文をノートに書き写す...。昼から宿題を始めたのに、気づくと夕食の時間。しかもテープはほとんど進んでいない。「こんなことだと、1本終わるのに何時間掛かるんだろう...」宿題をやり始めた1日目から、お先真っ暗となってしまった...

次の日も、朝からガチャガチャガチャン、ガチャガチャガチャン...。今の学生の皆さんは、この擬音語は何を示している音か分からないだろう。ビデオを再生しては巻き戻し、再生しては巻き戻している音である。横で見ていた母が、「あんた、ビデオデッキ壊さんといてや」と言う。「そんなん、壊さへんよ」と言いながら、ビデオデッキを触るとむちゃくちゃ熱くなっている。「確かに、やばいなあ...」と思いながらも、ひたすら宿題をせざるを得ないのである。しかもビデオは「1泊2日」で借りており、時間がない。結局必死で1本終え、店が閉まる直前の夜中にビデオを返しに行った。

翌朝、またビデオを借りに行く。それでまたガチャガチャガチャン、ガチャガチャガチャン。拾った音を英英辞典で引き、またガチャガチャガチャン、ガチャガチャガチャン...。こうやって、私の1年生の夏は、「ガチャガチャガチャン」の音とともに過ぎていった...

夏休み明けのスピーキングの授業。みんな顔を合わせるや否や、「たまらんかったわー」「夏休み、つぶれてしもたで」「Mムカツク」...といった調子で、すっかり参ってしまった様子。私としては、帰国子女の学生も「辛かった」と言っていたことに、少し喜びというか安堵の気持ちを抱いていた...。そこへM先生が登場!

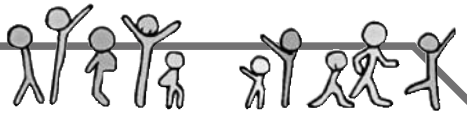
なんと真っ黒に日焼けして、満面笑みで“Hi, everyone!”と入ってくるや、自分の夏休みの話を始められた。「いやー、サントクルーズでサーフィン三昧でね。おかげで真っ黒に焼けちゃったよ、ハッハッハッ」...私も含め、みんなマグマが爆発しそうな顔をしている。M先生は嬉しそうに話を続ける中、ようやく我々の怒りの表情に気づいたのか、急に話をやめ、「そうだ、宿題を見せてもらおう」と、汗をかきながら、我々の机を回り始めた。このときの静かな教室を、今でも私は忘れられない(笑)。先生も「余計なことを言ってしまった...」と思ったことだろう。なぜか先生のお褒めのことばが多かった気がする(苦笑)。

ちなみに、私の80枚のノートはほぼ全て埋まってしまった。50枚のノートを買っていた学生も、結局2冊目を買った人が多かったので、みんな同じくらいたくさん表現を書いたのだろう。ちなみに、母から「壊さんといてやー」と言われていたビデオデッキも、実は壊れてしまった。相当、本来のビデオデッキの使い方から外れた使い方をしてしまったのだろう。

さて、宿題をやった当時は、この宿題の効果は全く分からなかった。ただ「しんどい宿題をさせて」という恨みばかり抱いていた。しかし、それからしばらくして、宿題の効果が如実に表れることとなる。英語がとてもよく聞こえるようになったのである。その変化に自分でもとても驚いた。あれだけ集中して本場の英語を聴いたことにより、相当リスニング力が上がったようである。また語彙も増え、キャッチできる表現も増えてきたのだろう。

本当にたいへんな宿題で、いま教壇に立っている私も、学生にこのタスクを課題として課すことはためらわれてしまう...。しかし、本気で英語のリスニング力を伸ばしたい学生には、お薦めの勉強法である。今、もしM先生に会うことができれば、「あのときは、ありがとうございました」とお礼を言いたい。当時はマグマ爆発寸前だったが、今は私と同じように感じている元クラスメイトは、きっとたくさんいると思う。

中国語学習 1 年目のみなさんへ



文学部 三野 豊浩

大家好！（みなさんこんにちは！）初級中国語担当の三野（みの / サンイエ）です。

私が中国語を学び始めたのは、みなさんと同じように、大学1年生となった1983年の春から。愛大で中国語の授業を担当するようになったのは、1997年の春からです。いつの間にか月日が流れ、今年は2016年。学び始めて34年、教え始めて20年。長いのか短いのか、ともかくそれだけの時間を中国語と共に過ごして来ました。今日は初級のみなさんのために、簡単なアドバイスをさせていただきたいと思います。

中国語のポイントは、やはり**何といってもまず発音**です。特に1年目は、発音練習こそすべてと言っても過言ではありません。授業で使っているテキストの最初に発音篇がありますが、ここにはみなさんが学習を続ける上で決して避けて通ることのできない、最も大切な事柄がぎっしり詰まっています。4通りの声調と軽声、36の母音と21の子音、声調の変化、アル化、声調の組み合わせ。本当は、ここだけを1年かけてじっくり勉強してもいいくらいです。さすがにそれでは単調で退屈でしょうが、もしみなさんが本気で中国語をマスターしたければ、そのくらいこの部分は大切なのだ、と思ってください。この最初の部分がちゃんと学習できないと、いつまでも先に進むことができません。それでは以下、声調、母音、子音の三つに分けて、それぞれのポイントを説明します。

(1) 声調 4通りの声調は、中国語の基本中の基本です。誰でも頭では理解できると思うのですが、実際には、照れくささもあってか、1

年たっても4通りを正しく発音できない人が案外います。恥ずかしがらずに、合唱の発声練習のつもりで**しっかり声を出してください**。1声は他の声調より少し長めに、音を平らに保って。2声は飛行機が滑走路から離陸するように、勢よく上昇。3声は声の底までぐっともぐって、軽く上がる。4声は声のてっぺんから一気にストンと落っこちる。たったこれだけですが、たったこれだけが本当にものすごく大切なんです。まんじゅうにたとえるなら、声調は皮（表面）ではなくアンコ（中身）です。意味の本質にかかわる根源的な要素だと思ってください。

(2) 母音 まず7つの**単母音**をしっかりと練習してください。aとoは口を大きく開けて。eはどっちつかずの曖昧な音。iは口の両端をぐっと引っ張って。uはホラ貝を吹き鳴らすように。üは口をとがらせて。最後のerは、eがアル化したものです。単母音がしっかり発音できるようになったら、次は複母音と鼻母音です。**複母音**（二重母音と三重母音）はそれほど難しくないと思いますが、問題は**鼻母音**（nとngの母音）です。数が多い上に、inとingなど、まぎらわしいものが少なくありません。しっかり区別して覚えてください。それから、ianは「イエン」、iangは「イア～(ン)」と覚えてください。授業でも言っていますが、**ピンインはローマ字や英語の綴りとは別のも**のです。そうそう、二重母音のwo(uo)を「ウー」と読んだり、三重母音のyou(iou)を「ユー」と読んだりするのも、よくある間違いですね。これも英語に引きずられてのことかと思います。もちろん、英語は英

語でしっかり学んでください。ただ**中国語を学ぶ時は、頭をちゃんとピンインモードに切り替えてほしい**ということです。難しいですか？

(3) 子音 いわゆる bo, po, mo, fo は、最初のうちは、できれば毎日でも練習してください。特に zhi, chi, shi, ri の**そり舌音**は、念入りに練習してください。舌をふとんをたたむように折りたたんで、上あごに押しつけるようにして発音します。特に最後の ri は、舌先をのどの奥に突っ込むようなつもりで。必要な音を的確に出せるようになるまで、根気よく練習してください。それから、ji, qi, xi と zi, ci, si をちゃんと区別して覚えてください。もう一つ大切なのが、**無気音と有気音の区別**です。声調の違いも大切ですが、無気音と有気音の違いも、それに勝るとも劣らず大切です。何しろ、息の出し方一つで全然違う意味になってしまうのですから。無気音は息をそっとやさしく。有気音は意識的に強く。バースデーケーキのロウソクの火を吹き消すように、と言えばわかりやすいでしょうか？

いろいろ細かく書き過ぎてしまったかも知れませんが、こんな風に書かれると、何だか中国語を習得するのは大変な苦労ばかり、どこまでも果てしないイバラの道、そんな印象を持たれるかも知れませんが、そんなことはありません。確かにコストパフォーマンスはあまりよくないかも知れませんが、粘り強く取り組めば、得られるものもきっとあるはず。長い目で見れば、必ずみなさんの財産となることでしょう。それでは、これから1年間、一緒に勉強して参りましょう。肝心なのは、続けることです。急がず、しかし休まずに。

加油！（がんばって！）



「英語が流暢に話せるといいな」と多くの人は思うでしょう。私も同じです。海外旅行でいろいろな国を訪れてその国の人と接する楽しさと、英語で話さなければならないストレスを経験してきました。今回、その経験の一部分を紹介します。

私は、小学校のころから ECC ジュニア教室に通い、中学校・高校での英語の成績は良い方で、英語が得意だと思っていました。しかし、大学1年次に短期語学セミナーでアメリカのオレゴン大学に約1か月滞在し、初めて英語が思った通りに話せないという経験をしました。大学4年次に再度挑戦しようと思い、イギリスのオックスフォードにある英会話学校に2週間行きました。でも、2度目も挫折に終わりました。英会話が嫌いになり後悔を残しながら大学を卒業しました。内定先は日系企業で、「生涯英語を使わなくて済むのだ」思っていました。

ところが、皮肉にも社会人になって初めての配属先は取引先の外資系企業で、グローバルサポート部門でした。そこでは、ドイツ人上司、アイルランドから来た従業員約10名が駐在していて、アジア全体の顧客を英語でサポートする業務が中心でした。その職場で、外国人従業員と日本人従業員・顧客との仲介役として、私が抜擢されてしまいました。他の日本人従業員は代わってくれません。なぜなら、大半の日本人従業員は、旅行でしか海外に行ったことがなく、英語で業務をしても英会話が苦手であるという背景がありました。英語での業務を続けるうちに、徐々に英語が話せるようになって

きました。「人は必死になると英語を話せるようになるのかな」と思っていると、理由は別にありました。それは、「I don't know. (知らない)」、「I don't understand. (分からない)」って言っても失礼に当たらない、「英語をネイティブのように話す必要性はない」ということに気が付いたからです。また、耳を澄ますと外国人従業員が話す英語は、必ずしも文法を守っているものではありませんでした。そこから、完璧主義から少し抜け出せ、失敗することに抵抗がなくなったように思えます。

やがて社会人になって2～3年が経ち、職場の同僚であった外国人従業員が親友になりました。その親友から、留学を進められ、「一度、会社を辞めて、海外から日本を見てみたら」と人生へのアドバイスをもらいました。日本社会では、社会人をやめて履歴書に穴をあけると良くないという傾向があるので悩みましたが、イギリスへの語学留学と大学院進学を決意しました。

イギリスの語学学校では、いろんな国から来ている仲間と日本での日常生活では味わえないような刺激的な日々を送りました。授業が終わった後も、一緒に夕飯をつくって食べ、宿題をこなすという日々でした。大学院では、英語漬けで専門知識を身に付ける日々を過ごしました。やがて、イギリスに滞在して4年ぐらいうると不思議な感覚に襲われました。英語で考えて英語で話す自分の方が、日本語を話す自分よりも率直な意見が言えていることに気がつきました。そして、あっという間にイギリスの滞在期間は7年を過ぎていました。

その後、日本での就職が決まり、イギリスを離れることになりました。そして、日本に帰ってきて約5年が経ちました。毎日英語漬けだった日々から、日本語だけを使う日々へと変化しました。授業ではあまり英語を使いませんが、国際学会や雑誌へ研究論文を投稿し、英語で研

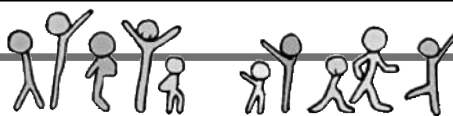
究発表を行っています。ネイティブレベルでない英語にコンプレックスを抱えつつも、意見交換することに刺激を感じています。(下の写真は、2015年10月下旬に学会報告した会場近くのセント・パンクラス駅です。)



イギリス セント・パンクラス駅
(2015年10月下旬)

学生さんの中には、英語は自分には必要ないから学習しないという考えを持っている方もいるかもしれません。私も大学を卒業したら、日系企業に就職し、生涯英語は必要ないものだと思っていました。でも、人生は何があるか分からないものです。また、日本の外で生きていくためには、他国の人との意思疎通が必要です。英語は意思疎通のツールになります。是非、大学生活のうちに英語を話す機会を作り、新しい世界を知る醍醐味を味わってください。好きな海外ドラマ、映画、洋楽から楽しんでみるのも手ではないでしょうか。英語を通じて知る世界は、広くそして刺激的です。苦勞もありますが、醍醐味もありますよ。

私のフランス語学習体験談



地域政策学部 岩崎 正弥

私は今を遡ること16年前、2000年にフランスへの海外研修の機会をいただきました。私はフランス地域政策の研究者ではなく、39歳という年齢での渡航だったため、語学の勉強には苦勞した思い出しかありません。現在まったくフランス語を使う機会のない私が執筆することに、正直場違いな感を抱いていますが、2016年度より地域政策学部の第二外国語履修にフランス語も認められました。そこで本誌編集委員に励まされ、とくに地域政策学部の学生の皆さんに向けて、以下ささやかな私の体験談を書いています。

1. 必要から学ぶ

語学（ないし外国研究）を専門としない私たちは、やはり必要から入ることが大切だと思っています。私はフランスの地域主義（régionalisme）—中央集権に抗して地域自立を追究する思想・運動—への関心が先行し、その必要のためにフランスへ行きたい、だからフランス語を学ばなければ、という流れでした。学び始めて最初に出くわした語句が *aménagement du territoire*（アメナジュマン・デュ・テリトワール）という言葉です。一応「国土整備」と訳せるのですが、しばらくすると *aménagement* のニュアンスが微妙だということに気づきました。動詞形 *aménager* は「いたわる、大切に扱う」という意味を語源とし、日本語の「整備」≒「開発」であった事実とは根本的に違うのです。*territoire* も同様で、「国土」「地域」と日本語に訳した時には欠けてしまう「私たちのもの」という意識が込められています。・・・と語学

学習とは関係なさそうなことを書きましたが、必要から学ぶ語学は、こういう専門用語に敏感になって、日本語や日本文化との比較から、私たちの見方を相対化できるところに醍醐味があります。その面白みが、私にとっては苦痛だった語学学習の励みになりました。

2. 現在進行形の言葉にふれる

2000年当時、豊橋校舎には国際コミュニケーション学部があり、オルレアン大学からの交換留学生がキャンパスにいましたので、研修を決意して1年近く（2人の留学生から）個人レッスンを受けました。私はその頃40歳に手が届く年齢、彼らは20歳代前半ですから、友だち(?)という関係ではありませんでしたが、家族ぐるみで交流しました。その中で学んだ言葉がいくつもあります。例えばフランスに行ったら（地域おこしの一環として）骨董市を調べたのですが、値段の交渉で *prix d'ami*（プリ・ダミ、友達の値段＝まけてください）という表現を覚えてもらい、実際とても重宝しました。その留学生の口癖が、*C'est pour ça que* ~（～だからです）だったので、（ああ、こういう時に使うんだ）ということをも身をもって教えられ、私自身の定型表現にさせてもらいました。残念ながら今フランス人留学生は豊橋キャンパスにはいませんが、Language Café を利用するなどして、普段着のフランス語に触れるチャンスを多くつくることが大切でしょうか。またNHKのBSニュースでフランス国営放送も視聴できますので、時事問題の勉強も兼ねて一石二鳥だと思います。

3. 現場に出かけること（地域を見つめ、地域を活かす）

英語と比べてフランス語の教材は圧倒的に少なかったため、限られた教材を繰り返し使うことになりました。今は教材も充実してきていると思いますが、私は「トレーニングペーパー」「コレクション フランス語」「子供新聞（Le Journal des Enfants）」などをよく使いました。特に子供新聞は表現も易しく、フランス事情の勉強もしながら、読んだり書いたりする練習にもなるのでお勧めです。とはいえ地域政策は現場が大切です。日本の地域もフランスの地域も現場を見つめないと、地域を活かす政策もわかりません。文献や映像を活用しながらも、やはり現場に行く機会をもつことです。私はオルレアンに滞在していましたが、南仏が好きで何度も足を運びました。美しい村々を訪れて何度ため息をついたことか。また骨董で有名な南仏の L'Isle sur la Sorgue（リル・スュル・ラ・ソルグ市＝ソルグ川の島）では、ソルグ川の水車に心癒され、多数の骨董品の店で目を楽しませ、美味しいメロン（生ハム乗せ）に舌鼓を打ちました（写真1、2、3）。現場の空気に触れることで、語学学習書や語学教室では学べない多くのことを体験できました。私はコミュニケーションが得意ではありませんが、現場は好きです。言葉は未熟でも、まずは現場に出てみることで必要を痛感し、必要からまた語学学習のモチベーションにする、この繰り返しが私の語学学習でした。

最後に、フランスでは小さな自治が徹底しています。日本の新たな地域自治のかたちを創造するためにも、少しフランス語にも触れ、フランスの地域のすがたを見つめたいと思う学生が現れて欲しいと願っています。



写真1 リルの水車と骨董市

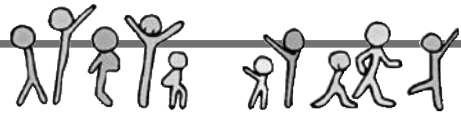


写真2 リルで骨董品店を営むオフレ夫妻



写真3 リル近郊のメロン栽培農家

ロンドンの生活



経済学部 竹内 晴夫

2007年9月から2008年9月にかけて、海外研修のため、イギリス・ロンドンとドイツ・ブレーメンに滞在した。最初の研修地であるロンドン（研修先はロンドン大学東洋アフリカ研究学院〔SOAS〕）に渡ったときは、直前にサブプライム・ローン問題で欧州金融危機が発生し、イギリスでも一部の銀行で「取り付け騒ぎ」が起こったときである。ロンドンでは、言葉の問題もあってか、日常生活では想像以上に難儀した。最初、不規則な鉄道システムに驚いたが、これは次第に慣れていった。ただ、電話会社や電気・ガス会社、銀行、税当局、語学学校等とはトラブルが続いた。盗難にも数回遭遇した。これらの経験をこの原稿ですべて披露することはできないが、銀行体験の一部について記しておこう。

私は、現地の発達した銀行システムを体験しようと、グローバル銀行であるHSBC銀行に口座を開設した。口座開設とともに小切手帳を渡された。小切手は、大学の授業では説明するが実際には使ったことがなかったので、少々手間取った。インターネットで調べながら書き込み、銀行で電気代・水道代を支払おうとしたが、窓口でその表記を訂正された。

また受け取ったキャッシュカードは直接に買物に利用できるの、さっそく近くのスーパー（Tesco）で使ってみた。日本では現金払いが多いが、ロンドンの日常生活では10£でさえキャッシュカード（デビットカード）で支払うこともあり、現金を使う場面が減った。カードの現金の引出限度額も1日200£（日本円で3万円程度）と少額であった。

ある日、銀行から電話がかかった。良い話があるから銀行に来て話を聴いてもらいたいとい

う。日本ではこういうことはないので変だなと思ったが、すぐに銀行に出かけて行った。銀行では、今持っている口座とは別に口座を開設しないかと勧められた。その口座は一種の定期性預金であったと思うが、私は短期滞在者であるし、そのような口座の必要性はないので断った。しかし、なかなか相手の銀行員は引き下らない。私は「新しく口座をつくるつもりはない」「顧客が望まない口座を勝手につくるべきではない」と少し怒り口調に言ったが、よくわからないというような顔をしている。そのとき銀行員がさかんに「インチリ」「インチリ」と言いながらあなたのためだと言っているのであるが、その意味がわからない。書いてもらおうと、*interest*（利子）であった。ロンドン訛りの英語のようであったが、金融のもっとも基本的な単語が聞き取れなかったかと少々がっかりしたが、ひるんでいる暇はない。私は、たとえ利子が大きくても *liquidity*（流動性）がないのではないかと反論した。この意味を相手が理解しなかったのか、あるいは銀行の至上命令で顧客の意思などおかまいなしなのかわからないが、押し問答になった。これ以上争ってもしょうがないので、ロンドン在住の知り合い（元ゼミ生）に来てもらい、再度交渉することとした。

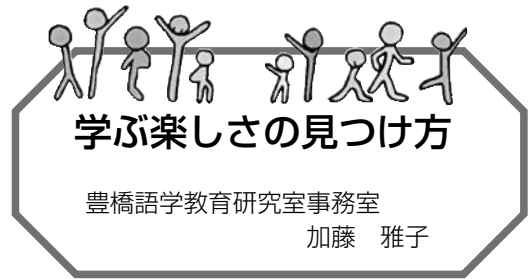
結局、2回目の話し合いで意思を明確に伝え口座開設を断った（と思った）。しかし、後からわかったことだが、この銀行は、私に口座開設を勧める電話をしたときには、すでに私名義の新口座をつくっており、現口座にある預金の半分の額を勝手に振り込んでいたのである。何とか新しい口座に振り込まれた預金は元の口座に戻してもらったが、結局、新口座自体は残ったままになった。

実感として、ここでは望まぬことに対してしっかり反論し抗議しないとやっていけないということである。この後、似たような体験をするたびに、現地の研究者にいつからこうなったのかとたずねたが、「新自由主義」のサッチャー時代からだという。しかしどうも納得しがたい。むしろ「万人の万人に対する闘争」(ホブズ『リヴァイアサン』)という表現が感覚的にしっくりくるので、近代以降のことではないかと疑っている。とはいえ、異なる社会に対する思い込みの部分もあるだろう。

いずれにせよ、もう少しイギリスに滞在してこの国を堪能すべきだった。イギリス研修後、ドイツ滞在中に2度イギリスを訪れたが、1度目は空港から直通のリバプール駅構内のATMでカードを挿入したら現金もカードも戻ってこなかった。この時もいろいろ手を尽くしたが、カードは戻らず利用停止にした。2度目はスタンステッド空港の入国審査にひっかかり結局ロンドンの地を踏むこともかなわなかった(10時間拘束されたあげくにドイツに送還された)。このように、私とイギリスとの相性はよくない。この国が生んだスミスやケインズ、そして亡命マルクス等の経済学の偉大な遺産は主要な研究対象であるが、私は、シェイクスピア、オースティン、ブロンテ姉妹、ディケンズ等のイギリス文学や映画のファンでもある。2008年7月以来、イギリスに渡っていないが、早くこの不幸な関係を解消したいと願っている。



テムズ川



日常生活で知らず知らずの内に話している言葉が、実は外来語というのは意外と多くあります。フランス語を専攻に決めた頃、フランス語の外来語を調べたことがあります。「クロワッサン:croissant」、「グランプリ:Grand prix」、「アンケート:enquete」、「アンコール:encore」など、予想をはるかに超える多さと本当に普段から聞きなれている言葉ばかりで驚きましたが、同時に、すでにフランス語に触れていたという事実にも喜びも感じていました。まずは、自分が学ぶ外国語にどんな外来語が存在するのか、調べてみると面白いかもしれませんね。

一般的にフランス語は『r』の発音の難しさや男性名詞・女性名詞で変わる冠詞、動詞活用 of the 複雑さなど、法則をマスターするまでの難しさはあります。入門時期には様々な法則を教わりますが、その中でも的確かつユニークな覚え方があります。3つの例を紹介すると・・・、

1. 『r』の発音

⇒「痰を吐くイメージ」。これには本当に苦戦しました。CDの音を耳に刻み込み、マスターするまで家でも道端でも(←周りに誰もいないのを確認してからね)、口癖のように繰り返し練習していました。それぐらい徹底的に取り組むと、発音のコツだけではなく、自然とリスニング力も鍛えられ、『r』を含む音の区別がつくようになりました。やはり語彙力を身につけるためには、声に出しての反復練習が重要だと実感した時期です。

2. Japonaise (ジャポネーズ／意味：日本人女性)

⇒ 私たちの食卓に欠かせない「マヨネーズ」の後半部分と発音が似ている。それからは、語尾に「aise」がきていれば、大体、発音の予想ができるようになります。

3. mille-feuille (ミルフィユ／フランスの代表的な洋菓子。意味：1,000 枚の葉っぱ)

⇒ 「feuille」の読みをカタカナで表すと「フィユ」に近く、「フィーユ」と発音してしまうと単語が「fille：女の子、娘」になり、意味が「mille-fille：1,000 の女の子」になってしまうので注意が必要。ちなみに、本場フランスのケーキショップならばともかく、日本ではここまで気にする必要はないです。普通に「ミルフィユ」と注文してください。元和洋菓子店勤務の私が断言します！

【仕事しながら語彙力もアップ！？】

そうなんです。学生時代のアルバイト先は和洋菓子店。洋菓子といえばフランス。フランスといえば私の専攻。まさに幸運の職場です。洋菓子には大抵材料に使われているフルーツや季節感、商品イメージを表すネーミングがフランス語で名記されます。例えば、「tarte aux fruits(タルト・オ・フリュイ)：フルーツタルト」、「Mont blanc (モンブラン)：白い山」、「chocola (ショコラ)：チョコレート」etc.

年間を通して約 130 種類の洋菓子を販売していたので、商品名を覚えながらフランス語の意味と発音も確認するという方法を実践していき、入門時期としてはとても早い段階で果実類の語彙数を増やしていくことができました。併せて、日常生活で目に入る物、耳にするフレーズもフランス語に置き換える癖をつけていました。初歩的でありきたりな勉強法かもしれませ

んが、置き換えに成功するたびに嬉しくなり、フランス語がどんどん身近な言語に変わっていききました。大袈裟だけど、一時期は英語を忘れてしまうぐらい、どっぷりフランス語に浸かっていました。いわゆるフランス語脳です。それぐらい私にとっては自信が持てる効果的な勉強法でした。

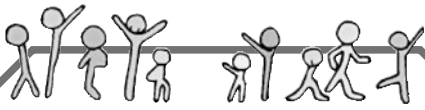
【初心忘るべからず】

入門時期から取り入れたこの勉強法で、フランス語を学ぶ喜びや楽しさを感じていたので、学年が上がり授業レベルが高度になった時でも、セミナー留学中にめげそうになった時でも、途中で挫折することなく最後まで意欲をもって取り組むことができました。

社会人になった今は、フランス語脳から遠ざかってしまいましたが、それでもフランス語に触れている時の心地良さは昔も今も一切変わりません。ランゲージセンターの書籍、DVD を活用しながら、ゆったり気分でフランス語を楽しんでいます。

外国語に興味を抱くキッカケも勉強法も人それぞれです。途中で行き詰ってしまうことも、自分の勉強法が正しいのか不安になることもあるかもしれませんが、最初に感じた自分の想いや目標を忘れないでください。“初心忘るべからず”ですよ。その想いを信じて自分のペースを守っていくことが大事だと思います。Bon courage !!





語学学習の苦労と醍醐味

名古屋語学教育研究室事務局
関 麻央里

語学学習に関しては苦労したことの方が容易に思い浮ぶ。なぜなら、まず日本語と発音が全然違うからだ。私は周りに帰国子女や英語が好きという子が多かったため、早い段階で英語に躰いた。というより... できるだろうと思っていたことができない、明らかに差が開いている、と感じた時に英語に対する興味等を失ってしまった。結局、一番真面目に英語の“授業”を聞いたのは大学でのK先生の授業くらいかもしれない。

「法学部やし、語学とかそんな要らんやろ～」という舐めたスタンスだったが、ふと高校時代、仲の良かった進路指導の先生に言われた「みんな揃ってスタートライン」という言葉を思い出し、第二外国語で頑張ってみよう！と決めた。フランス語とか喋れたら「格好ええやん」と単純な理由付きで。

不思議とこの理由の方が捗る！英語の時になかなか理解できなかった文法もフランス語だと何故か分かる。

どの語学に関しても共通で言えることだとは思うが、発音は苦労した。特に“r”の発音は気にしすぎると不自然になるので、如何に流暢に発音できるか悩み、テキストについていたCDを何度も聴いた。一部分でも分からないところがあったら巻き戻し(機械音痴だったため、何度も最初から)聴き直していた。結果、テキスト音声のマネが上手にできるようになった。

空きコマの時間だけはフランス語だけに集中する！という方法だったが、この時間しかない

と追い詰めることによって集中力を高めることができた。考えてみると色々なことを試している。帰り道に、目に入るフランス語はとにかく発音してみる、喫煙所で田川先生を待ち伏せてはフランス語で挨拶からの雑談。

自分でやる、と決めたことは必ず苦労する、でも後悔はしない。

人それぞれ醍醐味の感じ方があると思うが、私にとっての語学学習の醍醐味は、日常生活で目に入るフランス語が読めること、知見を得ること、楽しめることだと思う。

学生の外国語学習

中国語学習の苦労と 醍醐味

国際コミュニケーション学部4年
伴野 花恋

外国語と一括りに言っても、世界には無数の言語が存在します。私にとっての外国語学習は「中国語」です。入学当初、「中国語なんて漢字だから簡単でしょ～」というほんの軽い気持ち(ごめんなさい:笑)から第二外国語として履修し、すっかり中国語に魅了された3年次には上海へ1年間交換留学を行いました。そんな4年間を通じて、私が感じた苦労や醍醐味を紹介します。

中国語の難しい所、と言われると真っ先に「発音」が浮かびます。「日本語にはない発音+音の高さ」の使い分けには、とっっても苦労しました。自分では出来ているつもりなのに、ネイティブからの「全然違う!」の言葉には、何度も心が折れそうになりました...。そこで、発音はとにかく「聞いて、真似する」を徹底的に

行いました。街で聞こえたフレーズや、テレビから聞こえる言葉を真似て感覚で覚える事で、友人からも「発音上手になったね」と言われるようになりました。ですが、今でも「什么? (何だって?)」と聞き返される事も多く、まだまだ勉強しなければ... と思わされます。

では醍醐味は? と考えた時に、色々浮かびましたが「見えなかったものが見えるようになる感覚」が、語学学習を楽しいと思える一番の醍醐味だと思います。文化の基盤ともいえる言語を知り、その言語を話す人々にしかない概念や感覚を発見出来る、と考えるとワクワクしませんか? また、言語をツールとして使うことも一つの楽しみだと思います。私は、留学中に通っていた食堂のおばちゃんと仲良くなって上海語と麻雀のやり方を教えてもらったり、現在のアルバイト先で中国の方をお手伝いした時の「谢谢!」からそういった楽しみを得ることが出来ました。

語学学習は、自身の視野を広げる最初の扉だと思います。きっかけは何であれ、自分なりの「醍醐味」を探し出すことで必ず実りある学習になる、と4年間の中国語学習から学びました。勉強に時間を掛けられる今こそ、新しい扉を開けてみてはいかがでしょうか。



Enjoy a Detour

短期大学部2年 野津 祥代

今回この原稿の依頼を受けて、自分がどのように勉強してきたか... と考えてみると、文字にする程の事ではない!!! と思ってしまいました。でもせっかくなので、2つ紹介したいと思います。

1つ目: TOEICのスコアに伸び悩んだ時、「自分で発音できない単語を聞きとれると思うな。」というアドバイスをくれた先生がいました。リスニング、スピーキングに自信があった私にとっては衝撃的で、でも1つ壁が取っ払われたように思いました。リスニングは出来る、だからリーディングの為に語彙の勉強をと単語帳を開いて、たまに書き取りもしたり。でもそれだけじゃ、読み書きにしか活かせなかったんです。当たり前ですよ。先生からアドバイスをいただいてから、家族が引くほど単語を口に出して勉強するようになりました。弟に「気持ち悪い...」なーんて言われたこともあります。でもたぶん、語学って恥ずかしさを捨てたもん勝ちです。

2つ目: 昔も今もそしてこれからも変わらない、私が英語を学び続ける原動力... 音楽です。小中学生の時にアメリカンハードロックにハマったのをきっかけに、いわゆる洋楽が好きです。音楽もそうですが、私は人間性や私生活も合わせてアーティストを好きになったりします。なので、某動画サイトにあがっている字幕の付いていない海外でのインタビュー動画も理解したい! 恥ずかしながら、これが私にとっての原動力です。文法等正しくは無くとも生きた英語。スラングも山ほど覚えましたが、それと同時に教科書には載ってない表現にもたくさん触れることができる良い教材だと思っています。

1つ目のアドバイスをいただいてからは、インタビューをシャドーイングしたり一人の時に歌ってみたり。今すぐ海外の音楽を聴け!とは言えませんが、いつでも気軽に英語に触れられる、という意味では洋楽おススメです。

元々得意だったスピーキング・リスニングの力をより確かなものにするためにこの2つを続けてきましたが、不思議とリーディング・ライティングの力もつきました。即効性は無いけれど、楽しんでいる自分がいます。いきなり語学が得意になる近道は無いので、せっかくなら遠回りを楽しみませんか?

中国語を学んで感じたこと

経済学部2年 安田 成慶

私はこの一年間中国語を学んでみて、とても難しいと感じました。今まで慣れ親しんできた漢字なのに意味や使い方が違い、日本語で訳するときや音読をする時にも困りました。また、音読をするときには日本語にはない「声調」にとっても苦労しました。中国語は、その言葉の音だけではなくその音をどう発声するか、ということにも気を付けなくてはなりません。授業の中で声調の組み合わせを毎時間練習していても、実際の文章を読もうとするとなかなかすらすらと読むことができませんでした。

授業でやる範囲ごとに家で音読の練習をするように先生から言われていたので実際に音読の練習をしていました。それは10回読んで1回ノートに書くということを1セットとして、最低3セットはやるようにと言われていたものでした。私はその通りに毎週授業の前日の夜に練習をしました。授業を進めていくにつれて、文章の難易度は上がり、量も増えていきましたが私は最低でも小テストの範囲だけは音読の練習

をしようと思い、時間がない日でも最低3セットはやる、ということが続けました。CDの音声ではわからないような中国語独特の発声の仕方を授業で聞いたりすると、改めて中国語の難しさを感じ、そのたびに少しでもCDのように発声しようと思いました。

授業の中で音読のテストが1年を通して4回ほどありました。はじめのほうは文章量も少なく、読みやすかったためすらすらと読むことができましたが、2、3回とやっていくうちにだんだん難しくなっていきました。この漢字はどう読めばいいのだろう、と読んでいる途中なのに分からなくなってしまうこともありました。しかし、先生がやるようにと何度も言っていた練習を続けてきたからか、だんだん文章を1文字ずつではなく1つの流れとして、まるで歌のようにとらえるようになりました。その結果、4回目の音読のテストでは文章量はこれまでのテストより長かったにもかかわらず、一度も先生から指摘を受けることなく読み進め、最後まで読み切ることができました。

中国語は今世界で重要視されており、日本とはとても近い国であることからもっと中国語を学ぶべきだとも思いました。難しいですが、あきらめずに練習し続ければきっと中国語をマスターできます。私もまだまだできていないことが多いので、社会に出ていくまでもっと中国語について学び、上達させるべきだと感じました。



ドイツ語学習の楽しみ

文学部 4年 信田 佑哉

私は2015年7月にドイツ語技能検定三級を取得しました。大学2年から本格的にドイツ語を勉強し始めた私ですが、大学入学当初は英語を本格的に勉強しようと思っていました。しかし、専攻選択の際に、新しい語学の習得を目指した方が刺激的な学生生活を送れるのではないかと思いドイツ語を学ぶことに決めました。せっかく勉強するのだから、会話が成り立つぐらいのレベルにまで話せるようになることを目標にしました。

そして1年間大学でドイツ語を勉強した後の大学2年の春に、ドイツへ行ってきました。しかし、私のドイツ語は全くと言って良いほど齒が立ちませんでした。そこでドイツ語を勉強するためのモチベーションとしてドイツ語技能検定を受験することに決めました。決して安くない受験料を払って受験するのだから無駄にはしたくなかったので、単語帳で単語を覚えたり、私はサッカーが好きだったので動画サイトでドイツ人サッカー選手権のインタビュー映像を見るなど、毎日欠かさずドイツ語に触れるようにしました。

晴れてドイツ語技能検定三級に合格した後、毎日ドイツ語に触れるようにしました。そしてドイツ語に慣れてくると、ドイツ語ネイティヴの方との授業で、何を言っているのか次第にわかるようになってきました。3年生も終わりに近づく頃には、まだまだ初歩的な文法ながら、簡単なコミュニケーションを取れるようになるまでに成長しました。また、アルバイト先にドイツ人の方々が来て、ドイツ語で会話ができたときには、ドイツ語を勉強してきて良かったと思いました。

語学を習得するにあたり、検定試験の受験というのはあくまで通過点です。その言語を習得するための手段として、検定試験を活用するのが良いと思います。また、今はインターネットの時代です。動画サイトなど、活用の仕方によってはいくらでも勉強に使えんと思いますよ！

日本語学習の苦勞と醍醐味

地域政策学部 4年 張 添懿

日本語は日本に来てから、ゼロから学びました。私の親が日本で仕事をしているのをきっかけに来日しました。そして、日本語学校に通いました。

苦勞したことは敬語の勉強です。中国語は敬語が少ないので、初めて敬語を勉強すると、大変でした。「お」と「ご」がありますが、どんな時に「お」をつけるか、どんな単語に「ご」をつけるか。そういった敬語の勉強がすごく大変でした。例えば日本語の「お」は大変便利なものです。お名前、お宅、おとうさんの場合、すぐ話し手と聞き手の関係がわかるし、相手に対する尊敬の気持ちもよくわかります。そこでもし相手に尊敬の意を表すために「お」を、「くつした」や「コップ」という単語に使ったらどうなるか...と考えます。

醍醐味は漢字の勉強です。中国は漢字の国なので、漢字を覚えるのはそんなに難しくなかったです。新しく聞いた単語を漢字で分析すれば、その意味もわかります。「冷蔵庫」の冷は冷やす、蔵は「くら」だし、車庫の庫で、何か物置のようなイメージです。その3つの字を組み合わせれば何となく意味がわかります。

日本での生活が長くなると、日本語の勉強より、日本の文化が好きになりました。私は日本

語の勉強のためでなく、ただ好きだったという理由から日本語のCDをいつも聞いていました。バスや電車の中でCDを聞きながら歌詞を見るのが好きで、歌詞の内容を知りたいから辞書やネットで調べていました。これは新しい単語を覚えるのにすごく役立ちました。

外国語を勉強している人たちが言葉を習得するに当たって大事な事は、外国人の友人を作って話をする、すなわち覚えたフレーズを実際に口に出して訓練する事だと思います。

最近では、実際に日本に住んでいる外国人や留学生の人達と友だちにならなくても、インターネットを利用すれば、海外の友だちを探せるサイトなど数多くありますので、そのような手段を使って友だちを作り、スカイプなどで話したりチャットなどもできます。

私の経験から、外国語を習得するためにあながこれからやらなければならない事が、少しはハッキリしてきたのではないのでしょうか？！

ロシア語学習の苦勞と 醍醐味

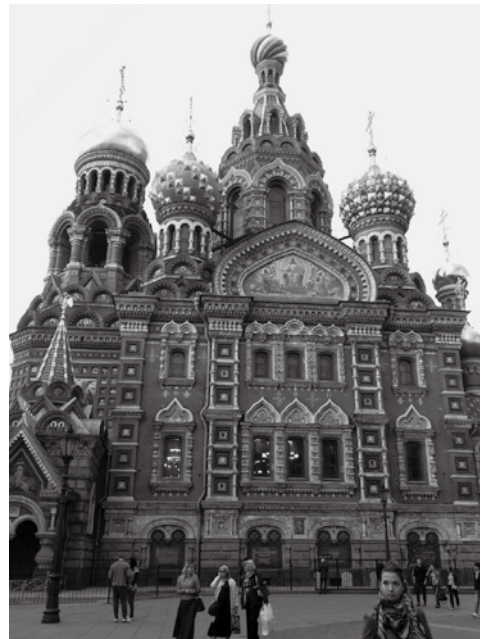
経営学部4年 辻村 慎志

中学生のころから英語が苦手だったため、外国なんて自分には縁のないもの、と決めつけていました。大学で第二外国語を履修しなければならないと知ったときには、嫌だなあと感じていました。

亡くなった祖父がロシア語をやっていたということもあり、1年間は頑張ってみようとロシア語を選択。見たこともない文字、聞いたこともない言葉に、最初はとても苦勞しました。

しかし、授業の中でロシアの美術や音楽について紹介されるうちに、次第にロシアに興味を持つようになりました。テレビのロシア語の学

習番組では、現地の食事や街並みも紹介されていて、ぜひ行ってみたいと思うようになりました。



血の上の教会

三年次の夏休みに、サンクトペテルブルクという都市に2週間の留学をしました。地下鉄のアナウンスも、街中のざわめきもすべてロシア語。そんな当たり前のことに驚きながらも、理解できるフレーズを耳にしたときは「解る、解るぞ」と感動しました。

小腹が空いたなと思い、一人でスーパーの菓子パン売り場を見ていたときには、お店の人に「お前、ホットドッグって知ってるか」と声をかけられました。ロシア語では、相手に対して使う動詞には、親しい間柄や目下の者に使う「お前」バージョンと、目上の人に使う「あなた」バージョンの2種類があります。このとき使われた動詞（知ってるか）が「お前」バージョンであることに気づけたことや、ロシア語で値段を訊ねてそのホットドッグを買えたことで、学習の成果を確かに感じる事ができました。



ロシアのスーパー

留学を終えてから学習番組を見ると、解る言葉が増えていました。私にとっての語学の面白みは、この「言葉が解るようになること」です。

4年次から私は新たにドイツ語、フランス語も履修しています。今はまだ、番組を見てもサッパリわかりませんが、いずれ「解る」感動を味わえると思うと、学習が楽しくてたまりません。

中学生の自分にこの話をしても、解ってもらえないだろうなあ。



本の家ドムクニーギ

そうだ、アニメを見よう！

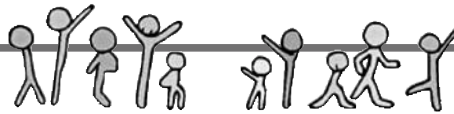
国際コミュニケーション学部4年

小島 友里亜

私が最近にしている勉強法について紹介したいと思います。それは、アメリカのアニメを見ることです。今までは、多読（簡単な英語の本を読むこと）やインターネットにある英文サイト（私は授業で教えてもらった英語のエッセイが読めるサイト）がメインでした。私は「外国語を勉強するなら、楽しくないことはしたくない」と考える人間なので、自分が好きだと思えないようなことはあまりしたくありません。なので、最近教えてもらったアメリカのアニメを見ながら楽しく勉強しています。

そのアニメは「My Little Pony」というアメリカのアニメです。このアニメは日本でも放映されていました。簡単なあらすじを説明すると、「キャラクター達が様々な事件を通して友情について学ぶ」というものです。女兒向けのアニメなので、パステル調の可愛らしいポニー達が沢山出てくるので見ていて飽きません。洋画みたいに日本語字幕が出てくるわけではないので、難しい表現には悩まされますが、何回も見ていくうちに内容や英語の発音が少しずつ聞き取れてくるので楽しく勉強することが出来ます。また、このアニメには劇中歌が沢山あります。正直女兒向けとは思えないくらいの高クオリティーの歌ばかりです。私はよく好きな歌を口ずさんで練習しています。そうすると、英語の文法や歌詞の意味が理解できるので勉強にもなります。皆さんに分かりやすいたとえをすると、「My Little Pony」は物語の構成が「アナと雪の女王」に近いです。劇中歌のあるアニメが好きな人には是非見てもらいたい作品です。

英語学習が中々思うように出来ずイライラしている人に私の体験が少しでも役立つことを心から願います。今回はアメリカのアニメでしたが、Disney 映画を字幕で見ても代用出来るかと思います。私が最も言いたいことは、そうだ、My Little Pony を見よう！



Canada Adventures in February 2016

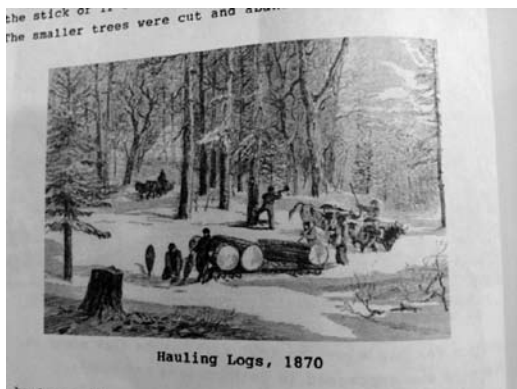
法学部 ジョン・ハミルトン

This was a kind of off-piste trip and I enjoyed myself. Everybody said “Don’t go to Canada in February. It is too cold. Only crazy people go to Canada in February.”

But I thought to myself, “Yes, well I am crazy.....and the students going on this trip were likely to be good sorts.....and what’s more, they come from the best university in Japan.....So I decided to go whatever.....!.....And also I wanted to see if I could find my Canadian cousins. In England I had telephoned relations but nobody had any telephone numbers or e-mails to give me. We seemed to have lost them.

I had two books to read on the plane. One was called ‘*The Hamiltons of Hawkesbury*’ by Pat Irwin. In the 19th century the Hamiltons had had a timber mill at Hawkesbury in the Ottawa river valley and they had made a fortune exporting logs to England during the Napoleonic wars and after that for nearly 100 years.

Here are two pictures from that book.



And the other book was called ‘*The Sea has many voices*’ by Kitty Griffin, a first cousin of my father. It is about family sailing holidays in the Great Lakes, down the American coast to the Caribbean, also in the Mediterranean....It is really about friends and different members of her family who joined in on the adventures...(The title comes from TS Elliot *The Dry Salvages*) . I knew that Kitty had died 5 years ago aged 99 leaving her husband Tony Griffin aged 100. And I had googled their son Scott Griffin and found that he had set up the Scott Griffin Poetry Prizes in Canada and was still alive. After reading Kitty’s book I really wanted to meet my Canadian cousins again. There was an address in the book, 21 Dunvegan Road Toronto. That was my lead.

The Air Canada flight from Haneda to Toronto was long, but I am used to that.One of the students, a boy from Kiyosu, spoke beautiful Japanese (with an Owari accent) I remember.....and there was a ‘First Nation’ stewardess, I think.....Toronto airport was full of

nuns.....Passport Control questioned the students one by one quite fiercely which was good for their English study. It mattered what they said ! And outside the airport the temperature was -17°C in the wind -41°C In the airport hotel I struggled, and the students did to, to make the showers work and to make cups of coffee with the unfamiliar coffee machines. They were more successful than me. The bus from Toronto to Kingston came at 11:00 am the next morning.



It was an old fashioned yellow school bus with hard seats and no seat belts and windows which shook open on the rough roads.....The luggage lift had frozen up so Mikawa sensei and I helped to load the luggage into the bus...It was quite cold in the bus even though the heater was on. On the bus I enjoyed talking to Natalia Martinelli-Luengo from the Canada Homestay Network. Her mother was from Venezuela and her father was Italian from Modena in Italy. Queens School of English had outsourced the homestays to CHN. From the bus we didn't see much of Lake Ontario, though coming back a week

later we had some nice views of it from the train.

The next day was a National Holiday in Canada, Family Day, and I was free, so I abandoned Mikawa sensei, jet-lagged and with all the responsibilities, and set off for Montreal. I wanted if possible to do the triangle, Kingston to Montreal, then up to Ottawa (taking in Hawkesbury on the way), and back to Kingston. But there were not very many buses, and it was very cold and I missed the connection at Berri UQAM by 15 minutes. In Montreal everybody speaks French and it is ethnically very diverse. I thought that the UQAM part might be Arabic but actually it stands for the University of Quebec and Montreal. So I spent the day exploring Montreal instead. Actually it was my second visit there. I had visited Canada in 1966 and stayed in Montreal a few weeks with my cousins the Wrights, before I went up to Oxford. At that time my father had written me an air letter asking me to order a chain mail fire curtain for our log fire in England. He sent me all the measurements and I ordered it and we still use it to this day. In England I have never seen another one like it. And the house has not burned down yet.

The Montreal underground smells like the Paris Metro and there were quite a few people asking for money in the walkways. I couldn't remember where the Wrights lived but I knew it was somewhere up on West Mount, so I walked up through McGill University and found myself in The Boulevard.....that was it, but I couldn't remember the number and the house somehow looked different. It is a funny thing visiting a place again after 50 years !

I got back to Kingston in the evening and the next day attended the classes at the Queens School



of English. The students had to sign a pledge (*sei-yaku* 誓約 in Japanese) only to speak English, and not to speak Japanese amongst themselves. They also had to sign a permission to share assessments with Aichi University because the marks were to be part of their degree in Japan. Natalia Martinelli-Luengo of CHN emphasised the importance of communicating with host families including electronic communications like texting in English. The families needed to know what they were doing and where they were. The Queens School of English was in the Faculty of Education building which had some nice pictures on the walls.

On that first day a SNOW STORM swept in from the Appalachians. 60 cms of snow fell on Kingston and we were worried that the students would not be able to get home. But the buses on the main routes kept running assisted by snow ploughs, and many Homestay parents turned up to collect



studentsso everybody got home safely.

I enjoyed my breakfasts in the Holiday Inn with Mikawa sensei. Out of the window we could see the Martello towers in Kingston harbour. These had been built in the 1840's during the Oregon Crisis to protect Canada from the Americans. This was the time of 'Manifest Destiny.' The Americans were heading West.....there was a war with Mexico from which they acquired Texas, New Mexico, Arizona and California, and they wanted British Columbia as well. There was an election slogan '54° 40 or fight'(54° 40 is the latitude that cuts across the north of British Columbia). In the end, by the Oregon Treaty in 1846 they settled for the 49th parallel as the border with Canada, and British Columbia and Vancouver Island remained part of Canada. Interesting to me was that the commander of the British Navy in the Pacific at this time was an Admiral Phipps Hornby, and his son Admiral Geoffrey Phipps Hornby was also there. There is a Hornby Island named after one of them between Vancouver Island and British Columbia. This family lived in our valley near Chichester in England, not far from Portsmouth. One or both of them may have lived in our house. I had been introduced to Kim Nossal, a Professor in the Politics Department at Queens University, but couldn't meet him because he was on sabbatical. He told me in an e-mail that the snow roofs on the Martello towers made them a bit different from Martello towers elsewhere.

For the next couple of days I explored Kingston and Queens University. The sun was shining and the city looked beautiful under snow. Lots of people were out there shovelling snow. Queens is one of the great universities in Canada. There are about 25,000 students. It was originally a



Montreal Map

Presbyterian foundation modelled on the universities in Glasgow and Edinburgh in Scotland. From 1978 to 1981 Prince Takamado of the Japanese Imperial family studied there. The Agnes Etherington Art Centre in the university houses at least two small Rembrandt portraits (I have never been closer to a Rembrandt !). I wanted to visit the Prison Museum (actually called the Penitentiary Museum which is part of the university) right next to the Faculty of Education building but it was closed for repairs. I think if Law students from Aichi go to the Queens School of English again, they must be introduced to this museum. Although we tend to forget about them, there are a lot of people in prison in the world, especially in the United States. Lawyers should know about prisons ! I also went up to the CATARAQUI shopping mall in the north part of Kingston where there was a Laura Secord Chocolate shop. Over many years every Christmas my Aunt Toots in Toronto used to send to us in England a

box of Laura Secord chocolates. I was happy to find that the quality of the chocolates has remained very high. They are quite delicious and actually Canada's best chocolates. But they are no longer sold in the same boxes which I thought was a pity. My Aunt Toots was living a very simple life when I visited her in 1966. To save money she never used to turn on the electric fire.....But when she died, she left a million dollars to her 17 nephews and niecesI think my father was able to buy a car.



Bicycle

The next day, we abandoned the students, and returned to Toronto by train along the side of Lake Ontario. I wanted to try to find my cousins so I caught a taxi from Union Station to 21 Dunvegan road. There was nobody living there. I asked somebody walking two dogs what I should do, and she suggested that I speak to Karen, the neighbour. Karen confirmed that Kitty had indeed died, but she thought that he, Tony Griffin, might still be alive in the old peoples home 300 yards up the road.....so I went there.....pulling my suitcase behind me.....and asked. But he had died too aged 104 about 5 months before. So I had just missed him! The Chinese girl running the home knew Tim Griffin's phone number and she gave him a call.....but he didn't pick up. That evening I was going to stay with a friend a

little bit to the west of Toronto at Humber Loop, so I gave the Chinese girl the friend's telephone numbers, and headed in that direction.

HUMBER LOOP is where the streetcar turns round and comes back. And my friend there was George Lashkia who works at the Toyota campus of Chukyo University. It was he who had told me that it was crazy to go to Canada in February.....and that I had been right the first time to refuse.....and that I had made a mistake when I changed my mind. George came from Abkhazia originally which was then a part of Georgia (still is!) He graduated from Moscow university in Computer Science and his parents and his wife and two children, Emily and little John now live in a 'condo' (condominium) at Humber Loop and he commutes there from Japan. I thought I was the only one who did that sort of thing. He just does it in the opposite direction. And the extraordinary thing was that I turned up on that day because they were celebrating his father and mother's diamond wedding (60 years married I think). So immediately we jumped in the car to go out to this very special celebration with his wife Kazumi-san at the wheel.....

And she told me that Tim Griffin had telephoned. Would I like to ring him back?so I rang him from the car. "It is John Hamilton speaking. I think I am your cousin but I am not quite sure how. I've come from Japan and I am going back tomorrow midday. Are you in Toronto? Could we have breakfast tomorrow? Yes, I will come to Dunvegan road at 8:00 am."

I don't remember very much about the Diamond Wedding party because I drank half a bottle of Armagnac. The other half was drunk by

George and his 87 year old father. We were in Sukhumi (it felt like that). It was a town I had never heard of before..... and there were Georgian delicacies on the table, pies with cheese in them, and a hog roast on the table. I found myself talking about the young Stalin and the robbing of the bank in Tbilisi (There is a good description in the Simon Sebag Montefiore book.) The morning after I found the name of Lamara Tarba with an e-mail address written on my napkin. A professor of pure mathematics, she had come from Moscow and had been sitting beside me. And there were Nana and Lili and an Ojisan who told good stories, and sang and drank a toast from a horn. There was somebody called Vlad....And there were people in Sukhumi on screen wishing the happy couple congratulations. In the end Kazumi-san rescued me and we escaped. I just remembered in time to pick up my passport which was in a plastic bag under the table. The Lashkias got the box of Laura Secord chocolates ! Another extraordinary thing about this evening was that I have recently become interested in the Black Sea area, and a month later I was in Romania and Istanbul, on the other side of the Black Sea.

I caught the tram from Humber Loop to Yonge Street at about 6:00 am the next day. Drinking coffee in MacDonalds I met an African who explained the Toronto underground to me, how I could get a train from Dundas to St Clair (and from there walk to Dunvegan road) and how later in the morning I could get to the airport via Kipling which was a much cheaper way than going there from Union Station. So that is how I met my cousin Tim for breakfast. It turned out that his grandmother and my grandmother were sisters. Aunt Toots was another sister. So we were quite close. My grandmother

was Jesse Hamilton Cassells. They were daughters of Sir Walter Cassells whose portrait hangs in the Toronto Golf Club. Next time I hope to go and see it. He was married to Susan Hamilton. Tim like me was a Churchill reader. I had with me in my suitcase the third and fourth volumes of the History of the English Speaking Peoples which contain good chapters on the history of Canada. Scott Griffin was at that moment sailing through the Beagle Channel heading for the Falkland Islands. His course was plotted on Tim's mobile phone. So I couldn't meet him. (A treat in store!) And Jim Wright who might have been living at The Boulevard in Montreal had been killed in a propane accident in his garage quite recently, having had a good life said Tim, but too short. George Wright, Tim told me, lives in Kingston, so I had missed him. But a while later I had a nice e-mail from him. He lives on the banks of the St Lawrence just after it flows out of Lake Ontario, and his children and grandchildren live in Vancouver. Tim was just off to Greenland with one of his children so I was lucky to catch him. He gave me his father's book which I read all the way back to Japan, and finished on the way back to England two days after that. It was a very good read but that is another collection of good stories. I had been 3/4 of the way round the world and the jet lag seemed to cancel out.

I don't know much about Toronto. Kingston is a very elegant city centred on the town hall, and cathedral and the Frontenac County Court House, and Queens University, and of course the prison. There are about 300,000 people so it is the same size as Toyohashi in Japan, though it wasn't bombed flat in the Second World War as was Toyohashi. Toronto spreads out along to Lakeside Boulevard

West—that is where Humber Loop is. According to the guidebooks there are 8.7 million people—presumably that is Greater Toronto - which is more than one quarter of the population of Canada, and 160 languages are spoken. I caught two taxis that morning in Toronto, both driven by Ethiopian taxi drivers. The second one cut in front of the tram to Humber loop so that I could get on it. On the tram the man beside me was talking on his phone in a language I did not know. I asked him and he said it was Albanian. I think I would be happy living in Toronto. It has moved on a bit from the days of Jesse Hamilton Cassells.



Kingston Prison Entrance

e ラーニング ～ 今号のオススメコース ～

e ラーニング（英語・中国語 e ラーニング）は、ネット上にある教材を利用して英語と中国語の学習を行う Web 学習システムです。Web 環境が整っていれば、24 時間いつでも教科書を持たずに学習ができるため、隙間時間を有効活用することができます。

学習コースは下記の 6 コースです。学習目的や自分のレベル・ペースに合わせてどんどん活用してください。利用料も無料です！

※スマートフォンや Mac、Firefox などには対応していません。

今号のオススメは、
こちらです。



【スーパースタANDARDコース】

e ラーニングを初めて学習する人、リスニング&リーディング力をバランスよく高めたい人にオススメ！

* ～ * 特 徴 * ～ *

- 学んだ語彙やフレーズ、内容理解度をテストするアドバンスモード学習は、英語力向上に効果的
- ディクテーション&シャドーイング学習を取り入れ、4 技能（読・書・聞・話）を鍛えながら修得

【STANDARDコース】

* ～ * 特 徴 * ～ *

- 3 度（学習前→中間→学習後）のレベル診断テストで着実なスキルアップを実感
- 速読スピードの測定機能つき。よりネイティブの会話速度へ近づける訓練が可能
- TOEIC テスト演習は旧形式

【初中級コース】

* ～ * 特 徴 * ～ *

- TOEIC テストの試験対策をパートごとに学習できる唯一のコース
- 自分の弱点だけを集めたオリジナル問題の作成機能つき。弱点を根本から解消
- 「文法リファレンス」で英語学習の基本事項を総復習

【PowerWords コース】

* ～ * 特 徴 * ～ *

- 英語学習に必須となる 12000 語の語彙を修得
- 三者択一、スペリング入力、サウンドマッチなど多面的学習で徹底的に語彙をマスター
- 「基本IT用語」や「略語」などの目的/ジャンル別学習はオススメ

【TOEICテスト演習2000コース】

* ～ * 特 徴 * ～ *

- TOEIC 本試験 + TOEIC IP 試験の対策に有効
- 明瞭な解説機能で、ミスを即座に解決
- 試験時間内の解答配分を養成（2 時間 / 1 時間 / 30 分の各コースから自由に選択）

【中国語コース】

* ～ * 特 徴 * ～ *

- 動画機能で実際のシチュエーションにあわせた実践が可能
- クイズ、リズムトレーニング、神経衰弱ゲームなど楽しく語彙修得できる工夫が満載
- 中国語検定準 4 級～3 級に対応。書き取り問題は印刷可能

e ラーニングに関する質問は、
各校舎語学教育研究室まで、
お問合せ下さい。

名古屋校舎：厚生棟 4 階
豊橋校舎：3 号館 1 階



e ラーニング ～ 利用者の声と利用状況 ～

☆少しずつ段階を踏んで進められ、一つの単語を繰り返し学習する構成のため、語学力がついたと感じる。(法学部 1 年／PowerWords コース)

☆かなりの語彙を暗記することができたので、リーディングの授業でもわかる単語が増えて、文が読みやすくなりました。(経済学部 1 年／PowerWords コース)

☆音で入ってくる点で多少の自信がついた。(経営学部 1 年／スタンダードコース)

☆読解力と語学力の自信がつきました。(現代中国学部 1 年／初中級コース)

☆TOEIC の点数だけでなく、リスニング対策では日常会話から演説まで様々な英語が聞けるのでリスニングの力が上がったと思う。(国際コミュニケーション学部 4 年／スタンダードコース、初中級コース)

☆時間を問わずに学習できること、リスニングが気軽にできること、その場で採点結果がでることが魅力です。(文学部 2 年／PowerWords コース)

☆自分が間違えた単語のスペルなど繰り返し出題されるため、嫌でも覚えることができるところが魅力です。(地域政策学部 4 年／PowerWords コース)

☆スラスラできるところが魅力。(短期大学部 2 年／初中級コース)



Welcome to Language Center!

1. 豊橋校舎 ランゲージセンター

ランゲージセンターは、外国語科目の教員が学生の外国語学習に役立つ教材を豊富に収集・整備している資料室です。

「大学で初めて学ぶ外国語を基礎からきちんとマスターしたい」、「すでに学んでいる外国語の応用力を身につけたい。レベルアップさせたい」、「外国語検定試験の対策を行いたい」など、様々な立場や視点・目的に合わせた外国語資料を約 1 万 500 点所蔵しています。

資料区分と各外国語の所蔵点数はこちらです（2016 年 4 月時点）。

【資料区分】

- ① 定期購読資料（NHK 語学講座、英字新聞、語学雑誌）
- ② 図書資料（一般書籍、参考書、ガイドブック）
- ③ 映像資料（DVD、ビデオ）

【所蔵点数】

言 語	英語	中国語	フランス語	ドイツ語	ロシア語
所蔵数（点）	2,932	1,552	978	975	1,001

言 語	韓国・朝鮮語	日本語（留学生用）	ポルトガル語	その他の言語
所蔵数（点）	566	1,044	62	1,384

言 語	NHK 語学講座	外国雑誌	英字新聞
所蔵数（点）	15	4	2

これらの資料の中には、教員や私達スタッフが特にオススメする資料もあるので、資料選びに迷った時には、ぜひ参考にしてください。

LL メディアルーム、シアタールームの充実設備をはじめ、貸出制度もあります。きっとみなさんの学習に役立つ一冊が見つかると思いますので、在学中に大いに活用してください。利用せずに過ごすなんて、もったいないですよ。



「ランゲージセンター」

2. 英語・中国語 e- ラーニング (アルク)

パソコンで英語と中国語を学ぶ Web 学習システムです。Web 環境が整っていれば、24 時間いつでも無料（※ 在学中のみ）で利用することができます。

リスニングとリーディングをバランスよく高めたい、語彙力を重点的に強化したい、TOEIC の試験対策および高スコアを目指したいなど、目的に合わせて自由にコースを選ぶことができます。詳細は 34 ページをご覧ください。

3. Language Café

ネイティブスピーカーの教員と気軽に楽しく外国語を学ぶ人気の Café です。昼休みはランチをしながら、夕方は様々なアクティビティを行いながら、自然と外国語のコミュニケーション能力が高まっていく空間になっています。それぞれのカフェでは、秋のハロウィーンパーティ（English Café）、新年の公現祭（Café Français）を企画するなど、ここでしか体験できない伝統行事もあります。

教員たちはとてもフレンドリーで明るく、一緒にいるだけで気分が楽しくなってきます。学部・学年を超えた交流も広がっていますので、ぜひ気軽に参加してください。

開催日時は次の通りです。

【開催日時】

開催言語	昼 休み (12:40 ~ 13:15)	夕 方 (16:40 ~ 適宜)
English Café	月・火・水	月・水・金
中文茶座	火	
Café Français	金	火 (隔週金に CINÉ CAFÉ)



English Café: Halloween Party



Café Français: 公現祭～ガレット・デ・ロワ～

2015年度（第21回） 外国語コンテスト結果報告

去る2015年11月から12月にかけて恒例の外国語コンテストが開催されました。第21回を迎えたコンテストも多く、多くの学生たちが参加し、朗読、暗誦、自由作文スピーチ、歌など、多様な種目でそれぞれの力を発揮してくれました。結果は以下の通りです。

講評等は語研HPにて閲覧できます。

英語

開催日時：2015年11月12日（木）14：00～

参加者総数：7名

課題：自作スピーチ

入賞者：

- | | | |
|----|--|-------|
| 1位 | 法学部3年 | 宮崎 琴巳 |
| | タイトル “What I learned from Mexican friends” | |
| 2位 | 国際コミュニケーション学部2年 | 高橋 千晴 |
| 3位 | 現代中国学部4年 | 呉 曉霞 |

ドイツ語

開催日時：2015年11月24日（火）18：10～

参加者総数：5名

課題：朗読

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 1位 | 国際コミュニケーション学部1年 | 恒川 友里 |
| 2位 | 国際コミュニケーション学部1年 | 鈴木菜々恵 |
| 3位 | 国際コミュニケーション学部1年 | 安井 美綺 |

フランス語

開催日時：2015年11月19日（木）12：30～

参加者総数：15名

課題：朗読

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------|------|
| 1位 | 国際コミュニケーション学部4年 | 東 果林 |
|----|-----------------|------|

2位 国際コミュニケーション学部4年 石川 奈歩

3位 法学部2年 國分 望

中国語

①対象学部：法学部・経営学部・経済学部・

国際コミュニケーション学部生

開催日時：2015年11月12日（木）11：00～

参加者総数：16名

課題：朗読

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 1位 | 法学部4年 | 谷川 和歩 |
| 2位 | 国際コミュニケーション学部4年 | 岩井 俊樹 |
| 3位 | 国際コミュニケーション学部1年 | 石川 春花 |

②対象学部：現代中国学部生

開催日時：2015年11月26日（木）16：00～

参加者総数：13名

課題：暗唱／自由

入賞者：

（課題部門）

- | | | |
|----|----------|-------|
| 1位 | 現代中国学部1年 | 中島 愛 |
| 2位 | 現代中国学部1年 | 藤井 悠 |
| 3位 | 現代中国学部1年 | 松井 真希 |

（自由作文部門）

- | | | |
|----|--------------|-------|
| 1位 | 現代中国学部4年 | 早川さゆり |
| | タイトル『人生的转折点』 | |

2位 現代中国学部4年 前田 春香

3位 現代中国学部1年 木村恵里香

ロシア語

開催日時：2015年12月1日(火) 16:30～

参加者総数：35名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

1位 法学部1年 刑部 友基

2位 経営学部1年 加藤日奈子

3位 経営学部1年 松下 遼太

韓国・朝鮮語

開催日時：2015年11月30日(火) 18:10～

参加者総数：42名

課題：暗唱／自由

入賞者：

1位 経済学部2年 岩野 仁美

2位 経営学部3年 文元 莉那

3位 経営学部2年 後藤 彰太

タイ語

開催日時：2015年11月24日(火) 16:30～

参加者総数：41名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

1位 国際コミュニケーション学部1年 牧野 春菜

2位 法学部1年 山本 奈那

3位 国際コミュニケーション学部1年 小島 千尚

日本語

開催日時：2015年12月1日(火) 12:30～

参加者総数：11名

課題：自作スピーチ

入賞者：

1位 国際コミュニケーション学部 (協定留学生)

刘 雄

タイトル「物を忘れやすい日本人」

2位 国際コミュニケーション学部 (協定留学生)

宋 欣

3位 経営学部1年 張 琳崧



2016年度 外国語検定奨励金のご案内

名古屋校舎			豊橋校舎	
言語	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定（英検）	準1級以上	実用英語技能検定（英検）	2級以上
	TOEIC	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC S/W	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定（国連英検）	B級以上		
	ビジネス通訳検定（TOBIS）	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士（通訳ガイド）	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	新HSK	3級以上	新HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力	2級以上	韓国語能力	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	3級以上		
日本語	日本語能力（JLPT）	N1級	日本語能力（JLPT）	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	450点以上

☆中国語は現代中国学部を除きます

受付期間 名古屋校舎 2016年2月1日まで

豊橋校舎 2016年2月24日まで

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生（協定留学生・大学院生・オープンカレッジ生等は除きます）



〈編集後記〉

今号の特集「外国語学習の苦勞と醍醐味」はいかがでしたか。この特集は、Aichi University Linguaの前身の一つである『GOKEN NEWS』第24号に、民法を専門とする先生が書かれたエッセイ「語学の季節」にヒントを得ました。ドイツ語およびフランス語学習でのホロ苦い体験を披露されています。今号にお寄せいただいた数多くのエッセイからも、皆さんの語学学習での奮闘ぶりがよく分かりますね。しかし、そのような努力の後に、「話せた！分かった！」というちょっとしたご褒美があるからこそ、語学の勉強は「やめられない、止まらない」のです！ことばの学習は、実に奥深い…。

(Y. K.)